

φ

スポットライトの光を浴びて、煌びやかな衣装を身に纏って。

広い会場を埋め尽くす観客の声援に後押しされて、私はマイクを構え直す。

流れる旋律、動き出した私のステージ。

静かなのはほんの最初だけ。

私が歌えば、会場の皆が応えてくれる。

手拍子で、かけ声で、いつしかそれらは一つになって、私を更なる高みへと導いてくれる。

曲や歌詞に込められた意味、届けたい想い。でもそれだけじゃなくて、その奥にある、言葉だけでは言えない熱い気持ちを、少しでも届けられたならば――。

φ

「お母さんお母さんおかあさうわあっ!？」

びたん！ となんとも漫画のような音を立てて、春香は自分の家の廊下でももの見事に転んでいた。

「あら、早速宣言撤回？」

台所から出てきた母親に開口一番そんな事を言われて、春香は「ううう」と小さく呻きながら起き上がる。その顔が赤くなっているのは、転んだ時に打ち付けた事もあるのだが、それ以上に恥ずかしさからくるものなのだろう。

『私、天海春香はあらゆるドジを中学校と一緒に卒業してきました。これから始まる私の伝説を楽しみにしておくがよいよっ』

などと親と友人の前で言い放ったのが三日前。新しく通う事になる高校に制服の採寸をしに行った時、仮試着をした際の事だった。

「ほら、大丈夫？」

「うう、たぶん平気」

我が子が派手に転んだ割には落ち着いた声で、母親がそつと手を差し出す。心配していない訳ではないのだが、如何せん、自己紹介をすれば「一日一回転びます」と言い出しかねない娘であるからして、一々心配しては、どれだけ広い懐を持っていたとしても、その内擦り切れてしまう。

「それで、そんなに慌ててどうしたの？」

と、そこまで言われたところで春香はハッと顔を上げた。

「そ、そそそそ、お、おおかおかあさささっ」

「いいから落ち着きなさい」

「はうっ！」

夕飯の準備中だったのだろうか、母親が持っていたお玉で春香の頭を景気よく打ち鳴らす。流石の春香もそれで気を取り戻したのか、はたまた痛みでそれどころではなかったのか、どちらにしてもひとまず黙りはしたのだが、しきりに頭をさすっているところを見るに、どうやら後者の方が正解のようだ。

「このような物が届きました故」

「ふむ、拝見致そう」

何故か時代がかった口調になった娘に即座に合わせる辺り、やはり親子なのだろうか。ともあれ、春香が差し出したのは一通の、少し大きな封筒だった。

「あら」

受け取った母親が、その宛先を見て一言。

「これって、前に春香がオーディションを受けたっていう事務所よねえ？」

「そ、そうなのっ。どうしようお母さん、私デビューだよ、アイドルだよっ！ ドームでお客さんがいっぱいですキャンダルって週刊誌に写真が載っっちゃって靴に画鋲とか入れられたりしてでも紫の薔薇の人が——」

「落ち着きなさい」

「はうっ！」

再びスコーン、と景気のいい音と立てて春香の頭が打ち抜かれた。

「お玉は武器じゃありません、と断固抗議したい気持ちがあつふつと沸き上がってくるのだが、そんな事をすれば目度く三度目のお玉を頂戴する事は目に見えている。

それでも、せめてこの内なる衝動を細やかでもいいから伝えねばなるまい、と一生懸命ジト目にして見ていると、

「合否の結果でしょう？ まだ開けてみないと解らないじゃない」

「ふえ？」

「そんな事を言われたのだが、咄嗟にその言葉の意味を理解する事が出来ず、春香は妙な返事と妙な顔のまま固まってしまった。

「オーディションを受けた日に春香言つてたじゃない。『合否に関わらず書類が届くんだった』って」

「……そういえばそうでした」

「当時の事を思い出したのか、途端に恥ずかしさがこみ上げてきた春香が、顔中を真っ赤にして縮こまってしまった。

「高校生になっても変わらなさそうねえ」

「あうう」

「まあ、その方が春香らしいのかしらね——はい」

「はえ？」

渡した封筒を戻されて、春香はまたしても妙な返事と妙な顔のまま固まってしまった。

「はえ？　じゃないでしょ。ほら、開けてみないと」

「あー……うう、ちよつと怖いかも」

先ほどまでの浮かれ具合も何処へやら。封筒の中身が輝かしい未来だけではないと知ってしまつた所為か、いざ開けてみようとしたところで、中々その手は動いてはくれなかった。

「お母さん、代わりに開けてよお……」

「自分の事でしょう。自分でどうにかしなさいな」

にべもなく言い返されて、春香は小さく呻いた。

最初こそ受かっているものだと思つて疑わなかつたのだが、悪い方面が見えてしまうと、人というものはどうしてもそちらばかりを気にしてしまうもので。

——落ちてたらどうしよう。

オーデイションを受けるまでは、そんなに気負つてはいなかつた。

小さい頃から歌う事が大好きで、これからも歌う事が出来たのなら、そして自分が歌う事によつて、誰かを笑顔にする事が出来たのなら。

そんな事を思つた時、このオーデイションが開催されるという事を知つたのだ。

物は試しだ行つてこい、と友人一同に背中を押されて向かったオーディション会場。次世代を担うアイドルを、という名目で集まった人は皆可愛い子ばかりで、自分はひよっとしたら凄く場違いなんじゃないかとさえ思った。事務所の人との面接の時、部屋に入るなり転んだりもしたし、緊張していた所為で受け答えだつて何を言つたか覚えていない。

でも、実技の時の歌だけは、良く出来たと思う。

最初こそ少し間違えたりもしたけれど、歌い出してみれば、それまで頭の中をぐるぐる回つていた事も周りの事も、一気に全部吹き飛んで。

技術的な事はよく解らないし、実際自分の歌がそんなに上手くない事は解っている。歌つた曲だつて流行りの歌じゃない、少し古い歌。でも精一杯、心を込めて歌つた。昔、私に歌う事の楽しさを教えてくれた人と、よく一緒に歌つた歌を。

「――よし」

意を決して、封を破っていく。

落ちたらもう一度、なんて事は思っていない。少しでも後ろを向いてしまえば、チャンスはその隙に逃げてしまうのだ。

「……」

封を開けて、中身を取り出していく。

ゆっくと、ゆっくと。

やがて姿を現したのは、一枚の真つ白な紙。

「真つ白？」

真つ白。白紙。故に無地。何も書いていない。

これはどういう事だろう？

そう思いながらも、頭のどこかでは「ああ、ダメだったんだな」と理解している自分がいた。不思議と涙は出ず、余計なものが全て排除されたかのように頭は冴え渡っていた。この紙と同じ、何もない真つ白な状態。どこまでも綺麗で、でもそれは自分の中に合った物が全部流されて、無くなったが故の虚無。

「春香、それ裏面よ」

「えっ!？」

呆然としていた所に一声かけられて、春香は慌てて持っていた紙をひっくり返す。確かに今まで見ていたのは裏面だったようで、そちら側には小さな文字で上から下までびっしりと何かが書かれていた。

それでも、春香の目はとある一点から動かなかった。動かす事が出来なかつた。

「お、おおか、おかおかおかおか——」

「おめでとう、春香」

今度ばかりはお玉が飛んでくるでもなく、代わりに向けられたのは、春香の大好きな母親の